

98-192

海潮音
上田敏譯



遙に此書を滿州なる森鷗外氏に獻す

大寺の香の烟はほそくとも、空にのぼりて
あまぐもとなる、あまぐもとなる。

獅子舞歌

序

卷中收むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊
太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴ
ンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに
達し、曩の高踏派と今の象徴派とに屬する者其
大部を占む。

高踏派の莊麗體を譯すに當りて、多く所謂七

二
五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉體を翻するに多少の變格を敢てしたるは、其各の原調に適合せしめむが爲なり。

詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意に非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭

西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす、今茲に一轉機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、エルレヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。譯者は今の日本詩壇に對て、專ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の

然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上
に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバチルの詩
に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪と以て
象徴派を攻むる者に同せず。幽婉奇聳の新聲、今
人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道
の盡くるあたり、荆棘路を塞ぎたる原野に對て、
之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非

らずむば情なり。

譯者嘗て十年の昔、白耳義文學を紹介し、稍後
れて、佛蘭西詩壇の新聲、特にエルレユヌ、エルハ
アレシ、ロオデンバツハ、マラルメの事を説きし
時、如上文人の作なほ未だ西歐の評壇に於ても
今日の聲譽を博する事能はざりしが、爾來世運
の轉移と共に清新の詩文を解する者、漸く數を

増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全歐思想界の一方に覇を稱するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近體新聲の耳目に嫺はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徙りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の傳來、日なほ淺く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅

に囁々の語を爲す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神經の銳きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徵候を呈したらずや。未だ新聲の美を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ、

歐洲の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無き

八
にあらざ、佛蘭西のブリュンチエル等の如きこ
れなり。譯者は藝術に對する態度と趣味とに於
て、此偏想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所
に一々首肯する能はざれど、佛蘭西詩壇一部の
極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を
傾く可きもの無しとせざるなり。而してヤスナ
ヤ・ポリヤナの老伯が近代文明呪咀の聲として、

其一端をかの「藝術論」に露はしたるに至りては、
全く賛同の意を呈する能はざるなり。トルスト
イ伯の人格は譯者の欽仰措かざる者なりと雖、
其人生觀に就ては、根本に於て既に譯者と見を
異にす。抑も伯が藝術論はかの世界觀の一片に
過ぎず。近代新聲の評隲に就て、非常なる見解の
相違ある素より怪む可きにあらず。日本の評家

一〇
等が僅に「藝術論」の一部を抽讀して、象徴派の貶斥に一大聲援を得たる如き心地あるは、毫も清新體の詩人に打撃を與ふる能はざるのみか、却て老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、伯と説を異にしなから、其論理上必須の結果たる藝術觀のみに就て賛意を表さむと試むるも難い哉。

象徴の用は、之が助を藉りて詩人の觀想に類似したる一の心狀を讀者に與ふるに在りて、必ずしも同一の概念を傳へむと勉むるにあらず。されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道斷の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釋は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心

状を喚起するに在りとす。例へば本書一五九頁「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釋を試むべき自由を有す。此詩を廣く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆は眼低し。法利賽の徒と共に虚偽の生を營みて、醜辱汚穢の沼に綱うつ、名や財や、はた樂欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風徐に羽撃きて、久方の天に

飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁こゝに漉へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞

理の捉へ難きに憧がる、哲人の愁思もほのめかさる。而して、此詩の喚起する心狀に至りては皆相似たり。二〇二頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」「樂欲」「驕慢」の邦に漂遊して、今や歸り來れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛れ、齋らす所只幻惑の悲音のみ。孤り、此等の姉妹と道を異にしたるか、終に歸り

來らざる「理想」は法苑林の樹間に「愛」と相睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香の美、今の佛詩壇に冠たる詩なり。

譯述の法に就ては譯者自ら語るを好まず。只譯詩の覺悟に關して、ロセツテイが伊太利古詩翻譯の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、

一六
既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清
新の趣味を犠牲にする事あるべからず。而も彼
所謂逐語譯は必らずしも忠實譯にあらず。され
ば「東行西行雲眇々。二月三月日遲々」を「とさまに
ゆき、かうさまに、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、
ひうらうら」と訓み給ひけむ神託もさることな
から、大江朝綱が二條の家に物張の尼が「月によ

つて長安百尺の樓に上る」と詠じたる例に従ひ
たる所多し。

明治三十八年初秋

上 田 敏

目次

燕の歌	一
釋曲	八
眞晝	九
大饑餓	一五
象	二三

珊瑚礁……………三七

床……………四〇

出征……………四三

夢……………四六

信天翁……………四九

薄暮の曲……………五二

破鐘……………五五

人と海……………五八

鼻……………六一

譬喩……………六七

よくみるゆめ……………七〇

落葉……………七三

良心……………七七

禮拜……………八八

わすれなぐさ……………一〇八

山のあなた……………一〇九

春.....一三一

秋.....一三三

わかれ.....一二五

水無月.....一二七

花のをとめ.....一二九

瞻望.....一二二

出現.....一二六

岩陰に.....一二九

春の朝.....一三二

至上善.....一三四

花くらべ.....一四一

花の教.....一四四

小曲.....一四七

戀の玉座.....一五〇

春の貢.....一五三

心も空に.....一五六

鷺の歌……………一五九
 法の夕……………一六三
 水かひ場……………一六八
 畏怖……………一七一
 火宅……………一七四
 時鐘……………一七七
 黄昏……………一八一
 銘文……………一八五

愛の教……………一九六
 花冠……………二〇二
 延びあくびせよ……………二二三
 伴奏……………二二〇
 賦……………二二四
 嗟歎……………二二六
 白楊……………二四〇
 故國……………二四一

海のあなたの………二四二

解悟………二四四

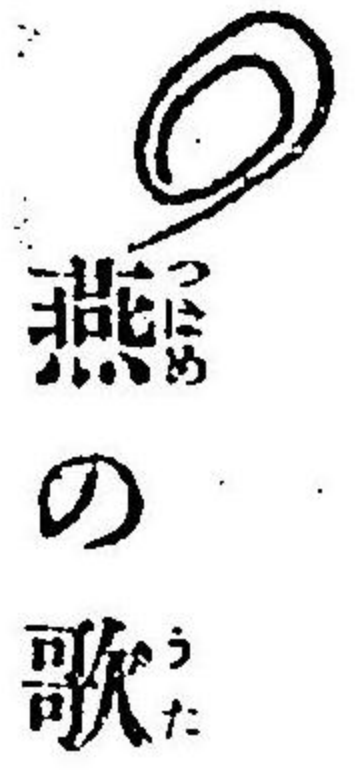
篠懸………二四六

海光………二四八

目次をほり

海潮音

上田 敏



彌生ついたちはつ燕
 海のあなたの静けき國の

便もてきぬうれしき文を。

春のはつ花にほひを尋むる

あゝよろこびのつばくらめ。

黒と白との染分縞は

春の心の舞姿。

彌生來にけり、如月は

風もろともに、けふ去りぬ。

栗鼠の毛衣脱ぎすて、

綾子羽ぶたへ、今様に、

春の川瀬をかちわたり、

あなだるゝ枝の森わけて、

舞ひつ、歌ひつ、足速の

戀慕の人ぞむれ遊ぶ。

岡おかに摘つむ花はな堇すみれぐさ、

草くさは香かりぬ、君きみゆるるに、

素足すあしの「春はる」の君きみゆるるに。

けふは野山のやまも新妻にひづまの姿すがたに通かひ、

わだつみの波なみは輝かがく阿古屋あこや珠たま。

あれ、藪陰やぶかげの黒鶇くろつぐさ。

あれ、なか空そらに揚あげ雲雀ひばり。

つれなき風かぜは吹ふきすぎて、

舊巢ふるす啣くはへて飛とび去さりぬ。

あゝ、南國なんごくのぬれつばめ、

尾羽おは矢羽根やばねよ、鳴なく音ねは弦ひを

「春はる」のひくおと、「春はる」の手ての。

あゝ、よろこびの美鳥よ、
黒と白との水干に、
舞の足どり教へよと、
まばし招がむつばくらめ。
たぐひもあらぬ麗人の
イソルダ姫の物語、
飾り畫けるこの殿に

まばしはあれよつばくらめ。
かづけの花環ここにあり、
ひとやにはあらぬ花籠を
給ふあえかの姫君は、
フランチェスカの前ならで、
まことは「春」のめがみ大神。

「ダンヌンチオ」——「フランチェスカ・ダ・リミニ」

○ 聲 曲

八

われはきくよもすがらわが胸の上に君眠る時
吾は聴く夜の静寂に滴の落つるを將落つるを
常にかつ近みかつ遠み絶間なく落つるをきく
夜もすがら君眠る時君眠る時われひとりして

〔ダンヌンチオ——「シオパン即興樂」〕

、 眞 晝

「夏の帝の眞晝時」は大野が原に廣がりて、
白銀色の布引に青天くだし天降しぬ。
寂たるよもの光景かな耀く虚空風絶えて、
炎のころも纏ひたる地の熟睡の静心。

九

眼路眇茫として極無く、樹蔭も見えぬ大野らや、
牧の畜の水かひ場、泉は涸れて音も無し。
野末遙けき森陰は、裾の界の線黒み、
不動の姿夢重く、寂寞として眠りたり。

唯熟したる麥の田は、黄金海と連なりて、
かぎりも波の搖蕩に、眠るも鈍と嘲みがほ、

聖なる地の安らけき兒等の姿を見よやとて、
畏れ憚るけしき無く、日の觴を嚙み干しぬ。

また邂逅に吐息なす心の熱の穂に出で、
嘯聲のそこはかと、鬚長穎の胸のうへ、
覺めたる波の搖動や、うねりも貴におほどかに
起きてまた伏す行末は沙たち迷ふ雲のはて。

程遠からぬ青草の牧に伏したる白牛が、
肉置厚き喉袋涎に濡らす慵げさ、
妙に氣高き眼差も、世の煩累に倦みしごと、
終に見果てぬ内心の夢の衢に迷ふらむ。

人よ、爾の心中を、喜怒哀樂に亂されて、

光明道の此原の眞晝を孤り過ぎゆかば、
道がれよ、こゝに萬物は、凡べて虚ぞ、日は燬かむ。
ものみな、こゝに命無く、悦も無し、はた憂無し。

されど涙や笑聲の惑を脱し、萬象の
流轉の相を忘ぜむと、心の渴いと切に、
現身の世を赦しえず、はた咀ひえぬ觀念の

一四
眼放ちて、幽遠の大歡樂を念じなば、

來れ、此地の天日にこよなき法の言葉あり、
親み難き炎上の無間に沈め、なが思、
かくての後は、濁世の都をさして行くもよし、
物の七だひ涅槃に浸りて澄みし心もて。

〔ルコント・ドゥ・リイル——『古代詩集』〕

大饑餓

夢圓なる滄溟、濤の巻曲の搖蕩に
夜天の星の影見えて、小島の群と輝きぬ。
紫摩黄金の良夜は、寂寞としてまた幽に、
奇しき畏の満ちわたる海と空との原の上。

無邊の天や無量海底ひも知らぬ深淵は
 憂愁の國寂光土また譬ふべし炫耀卿
 墳塋にしてはた伽藍赫灼として幽遠の
 大荒原の縦横をあら萬眼の魚鱗や。

青空かくも莊嚴に大水更に神寂びて、
 大光明の遍照に宏大無邊界中に、

うつらうつらの夢枕煩惱界の諸苦患も、
 こゝに通はぬその夢の限も知らず大いなる。

かゝりし程に粗膚の蓬起皮の老なやかに
 飢にや狂ふおどろしき深海底のわたり魚
 あふささるさの徘徊に身の鬱憂を紛れむと、
 南蠻鐵の腮をぞくわつとばかりに開いたる。

素より無邊天空を仰ぐにはあらぬ魚の身の、
 參の宿みつ星や三角星や天蠍宮、
 無限に曳ける光芒のゆくてに思馳するなく、
 北斗星前横はる大熊星もなにかあらむ。

唯ひとすちに生肉を嚙まむ、碎かむ割かばやと、

常の心は朱に染み、血の氣に欲を漑へつゝ、
 影暗うして水重き潮の底の荒原を、
 曇れる眼、きらめかし、悽慘として遅々たりや。

こゝ虚なる無聲境、浮べる物や泳ぐもの、
 生きたる物も、死したるも此空漠の荒野には、
 音信も無し、影も無し。たゞ水先の小判鮫、

眞黒の鱧のひたうへに、沈々として眠るのみ。

行きね妖怪なれが身も人間道に異ならず、

醜悪、獐猛、暴戾のたえて異なるふしも無し。

心安かれ、鱧ざめよ、明日や食らはむ人間を。

又さはいへど、汝が身も明日や食はれむ人間に。

聖なる飢は正法の永くつゞける殺生業、

かけ深海も光明の天つみそらもけぢめなし。

それ人間も、鱧鮫も、残害の徒も、餌食等も、

見よ、死の神の前にして、二つながらに罪ぞ無き。

〔ルコント・ドゥリール——「悲壯詩集」〕

象

沙漠は丹の色にして、波漫々たるわだつみの
音あづまりて、日に燉けて、熟睡の床に伏す如く、
不動のうねり、大らかに、ゆくらゆくらに傳らむ、
人住むあたり銅の雲たち籠むる眼路のすゑ。

命も音も絶えて無し。餌に飽きたる唐獅子も、
百里の遠き洞窟の奥にや今は眠るらむ。

また岩清水迸る長沙の央、青葉かけ、
豹も来て飲む椰子森は、麒麟が常の水かひ場。

大日輪の走せ廻る氣重き虚空鞭うつて、
羽搔の音の聲高き一鳥遂に飛びも來ず、

たまたま見たり、蟒蛇の夢も熱きか圓寢して、
とぐろの綱を動せば、鱗の光まばゆきを。

一天霽れて、そが下にかゝる炎の野はあれど、
物鬱として、寂寥のきはみを盡すをりしもあれ、
皺だむ象の一群よ、太しき脚の練歩に、
うまれの里の野を捨て、大沙原を横に行く

地平のあたり、一團の褐色なして、列なめて、
みれば砂塵を蹴立てつゝ、路無き原を直道に、
ゆくてのさきの障碍をもどかしとてや、力足、
踏躡るこむむ勢に、遠の砂山崩れたり。

導にたてる年嵩のてだれの象の全身は

「時」が噛みてし、刻みてし老樹の幹のごと、ひわれ
巨巖の如き大頭、脊骨の弓の太しきも、
何の苦も無く、自ずから滑らかにこそ動くなれ。

歩遅むることもなく、急ぎもせず、悠然と、
塵にまみれし群象を、めあての國に導けば、
沙の畦くろ、穴に穿ち、續いて歩むともがらは、

雲突く修驗山伏か、先達の蹤踏でゆく。

耳は扇とかざしたり、鼻は象牙に介みたり、
半眼にして、辿りゆくその胴腹の波だちに、
息のほてりや、汗のほけ、烟となつて散亂し、
幾千萬の昆蟲が、うなりて集ふ餌食かな。

饑渴の攻や、貪婪の羽蟲の群もなにかあらむ、
黒皺皮の満身の膚をこがす炎暑をや。

かの故里をかしまだち、ひとへに夢む、道遠き
眼路のあなたに生ひ茂げる無花果の森、象の邦。

また忍ぶかな、高山の輿より落つる長水に
巨大の河馬の嘯きて、波濤たぎつる河の瀬を、

あるは月夜の清光に白みしからだ、うちのばし、
水かふ岸の葦蘆を踏み碎きてや、降りたつを。

かゝる勇猛沈勇の心をきめて、さすかたや、
涯も知らぬ遠のする、黒線とほくかすれゆけば、
大沙原は今さらに不動のけはひ、神寂びぬ。
身動迂き旅人の雲のはたてに消ゆる時。

〔ルコント・ドゥリイル』異邦詩集』

ルコント・ドゥリイルの出づるや、哲學に基ける厭世觀は佛蘭西の詩文に致死の棺衣たむぎを投げたり。前人の詩、多くは一時の感慨を洩し、單純なる悲哀の想を鼓吹するに止りしかど、此詩人に至り、始めて、悲哀は一種の系統を樹て、藝術の莊嚴を帶ぶ。評家久しく彼を目するに高踏派の盟主を以てす。即ち格調定かならぬドゥ・ミユッセエ、ラマルティエヌの後に出で、始て詩神

の雲髪を捉みて、之に峻嚴なる詩法の金櫛を加へたるが故也。彼常に「不感無覺」を以て稱せらる。世人輒もすれば、此語を誤解して曰く、高踏一派の徒、甘じて感情を犠牲とす。これ既に藝術の第一義を没却したるものなり。或は恐る、終に述作無きに至らむをと。あらず、あらず、此暫々濫用せらるゝ「不感無覺」の語義を藝文の上より解する時は、單に近世派の態度を示したるに過ぎざるなり。常に宇宙の深遠なる悲愁、神祕なる歡樂を覺ゆるものから、當代の

愚かしき歌物語が、野卑陳套の曲を反復して、
 譬へば情痴の涙に重き百葉の輕舟、今、藝苑の
 河流を閉塞するを敬せざるのみ、尋常世態の
 瑣事、奚ぞよく高踏派の詩人を動さむ。されど
 之を倫理の方面より觀むか、人生に對する此
 派の態度、これより學ばむとする教訓は此一
 言に現はる。曰く哀樂は感ず可く、歌ふ可し、而
 も人は斯多阿學徒の心を以て忍ばざる可か
 らずと。かの額付物思はしげに、長髪わざとら
 しき詩人等も、此語には辟易せしも多かり。

されば此人は藝文に劃然たる一新機軸を出
 し、者にして同代の何人よりも、其詩、哲理に
 富み、譬喩の趣を加ふ。カイン「サタン」の詩二つ
 ながら人界の災殃を賦し、「イバテイ」は古代衰
 亡の頽唐美、「シリル」は新しき信仰を歌へり。ユ
 ウゴオが壯大なる史景を咏じて、臺閣の風あ
 る雄健の筆を振ひ、史乘逸話の上に敘情詩め
 いたる豊麗を與へたと並びて、ルコント・ドゥ
 リイルは、傳説に、史蹟に、内部の精神を求めぬ。
 かの傳奇の老大家は歴史の上に燦爛たる紫

雲を曳き、この憂愁の達人は其實體を闡明す、
 讀者の眼頭に彷彿として展開するものは、豪
 壯悲慘なる北歐思想、明暢清朗なる希臘田野
 の夢、または銀光の朧々たること、其聖十字架
 を思はしむる基督教法の冥想、特に印度大幻
 夢涅槃の妙説なりけり。

黒檀の森茂げき此世の涯の老國より來て、彼
 は長久の座を吾等の傍に占めつ、教へて曰く、

「寂滅爲樂」

幾度と無く繰返したる大智識の教話により
 て、悲哀は分類結晶して、頗る靜寧の姿を得た
 るも、なほ、をりふしは憤怒の激發に迅雷の轟
 然たるを聞く。是に於てか電火ひらめき、萬雷
 はためき、人類に對する痛罵、宛も樂綫の爆發
 する如く、所謂「不感無覺」の墻壁を破り了ぬ。

自家の理論を詩文に發表して、シオベンハウエ

ルの辨證したる佛法の教理を開陳したるは、此詩人の特色ならむ。儕輩の詩人皆多少憂愁の思想を具へたれど、厭世觀の理義彼に於ける如く整然たるは罕なり。衆人徒に虚無を讃す、彼は明かに其事實なるを示せり。其詩は智の詩なり。而も詩趣饒かにして、坐ろにベラスゴイ、キユクロプスの城址を忍ばしむる堅牢の石壁は、かの纖弱の律に歌はれ、往々俗謠に傾ける當代傳奇の宮殿を摧かむとすなり。

〔エミール・ゾラハアレン〕

珊瑚礁

波の底にも照る日影、神寂びにたる曙の
 照しの光、亞比西尼亞、珊瑚の森にほの紅く、
 ぬれにぞぬれし深海の谷隈の奥に透入れば、
 輝きにほふ蟲のから、命にみつる珠の華。

沃度に、鹽にさ丹づらふ海の寶のもろもろは
濡髪長き海藻や、珊瑚海膽苔までも、
藤脂紫あかあかと、華奢のきはみの繪模様
に、
薄色ねびしみどり石蝕む底を被ひたる。

鱗の光のきらめきに白瑣瑤を曇らせて、
枝より枝を横ざまに、何を尋ぬる一大魚

光透入る水かげに慵げなりや、もとほりぬ。

忽ち紅火飄へる思の色の鱗ふるひ、
藍を湛へし静寂のかけ、ほのぐらき青海波、
水揺りうごく搖曳は黄金眞珠青玉の色。

〔ホセ・マリヤ・デ・エレディア — 戦勝標〕

床

さゝらがた錦を張るも、荒妙の白布敷くも、
悲しさは墳塋のごと、楽しさは巢の如しとも、
人生れ、人いの眠り、つま戀ふる凡へてこゝなり、
をさな兒も、老も若も、さをとめも、妻も、夫も。

葬事、まくばひほがひ、烏羽玉の黒十字架に、
淨き水はふり散らすも、祝福の枝をかざすも、
皆こゝに物は始まり、皆こゝに事は終らむ、
産屋洩る初日影より、臨終の燭の火までも、
天離る鄙の伏屋も、百敷の大宮内も、
紫摩金の榮を盡して、紅に朱に矜り飾るも、

鈍色の檜のつくりや、楓の木杉の床にも。

四二

獨り、かの畏も悔も無く眠る人こそ善けれ、
みおやらの生れし床に、みおやらの失にし床に、
物古りし親のゆづりの大床に足を延ばして。

〔ホセ・マリヤ・デ・エレディア — 『戦勝標』〕

出征

高山の鳥栖巢だちし兄鷹のごと、
身こそたゆまね、憂愁に思は倦じ、
モゲルがた、バロスの港、船出して、
雄詰ぶ夢ぞ逞ましき、あはれ、丈夫。

四三

チバンゴに在りと傳ふる鑛山の
紫摩黄金やわが物と遠く求むる
船の帆も撓わりにけりな時津風
西の世界の不思議なる遠荒磯に。

ゆふへゆふへは壯大の旦を夢み、
しらぬ火や、熱帯海のかちまくら、

こがね幻通ふらむ。またある時は

白妙の帆船の舳さき、たゞずみて、
振放みれば、雲の果、見知らぬ空や、
蒼海の底よりのぼる、けふも新星。

〔ホセ・マリヤ・デ・エレディア——「戦勝標」〕

夢

夢のうちに、農人曰く、なが糧をみづから作れ、
けふよりは、なを養はじ、土を墾り種を蒔けよと。
機織はわれに語りぬ、なが衣をみづから織れと。
石造われに語りぬ、いざ饅をみづかれ執れと。

かくて孤り人間の群やはれて解くに由なき
この咒咀、身にひき纏ふ苦しさに、みそら仰ぎて、
いと深き憐愍垂れさせ給へよと、禱りをろがむ
眼前、ゆくての途のたゞなかを獅子はふたぎぬ。

ほのぼのとあけゆく光、疑ひて眼ひらけば、
雄々しかる田つくり男、梯立に口笛鳴らし、

四八
紺具の陽木もとゝろ、小山田に種ぞ蒔きたる。

世の幸を今はた識りぬ、人の住むこの現世に、
誰かまた思ひあがりて、同胞を凌ぎえせむや。
其日より吾はなべての世の人を愛しそめけり。

〔シユリ・ブリエドン——詩集〕

信天翁

波路遙けき徒然の慰草と船人は、
八重の潮路の海鳥の沖の太夫を生擒りぬ、
楫の枕のよき友よ心閑けき飛鳥かな、
奥津潮騒すべりゆく艇近くむれ集ふ。
たゞ甲板に据ゑぬればげにや笑止の極なる。

この青雲の帝王も、足どりふらゝ、拙くも、
 あはれ、眞白き双翼は、たゞ徒らに廣がりて、
 今は身の仇益も無き二つの權と曳きぬらむ。
 天飛ぶ鳥も、降りては、やつれ醜き瘠姿、
 昨日の羽根のたかぶりも、今はた鈍に痛はしく、
 煙管に嘴をつゝかれて、心無には嘲けられ、
 老どろの足を摸ねされて、飛行の空に撞がるゝ、

雲居の君のこのさまよ、世の歌人に似たらずや、
 暴風雨を笑ひ、風凌ぎ獵男の弓をあざみしも、
 地の下界にやはられて、勢子の叫に煩へば、
 太しき双の羽根さへも起居妨ぐ足まとひ。

〔ボドレエル——「悪の華」〕

薄暮の曲

時こそ今は水枝さす、こぬれに花の顫ふころ。
花は薫じて追風に、不斷の香の爐に似たり。
匂も音も夕空に、とうとうたたり、とうたたり、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈よ、
花は薫じて追風に、不斷の香の爐に似たり。

疾に悩める胸もどき、井オロン樂の清搔や、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈よ、
神輿の臺をさながらの雲悲みて艶だちぬ。
疾に悩める胸もどき、井オロン樂の清搔や、
闇の涅槃に、痛ましく悩まされたる優心。
神輿の臺をさながらの雲悲みて艶だちぬ、
日や落入りて溺るゝは、凝るゆふへの血潮雲。

闇の涅槃に、痛ましく惱まされたる優心、
 光の過去のあとかたを尋めて集むる憐れさよ。
 日や落入りて溺るゝは、凝るゆふへの血潮雲、
 君が名残のたゞ在るは、ひかり輝く聖體盒。

〔ボドレキル——「悪の華」〕

破鐘

悲しくもまたあはれなり、冬の夜の地爐の下に、
 燃えあがり、燃え盡きにたる柴の火に耳傾けて、
 夜霧だつ闇夜の空の寺の鐘、きゝつゝあれば、
 過ぎし日のそこはかとなき物思やをら浮びぬ。

喉太の古鐘きけば、その身こそうらやましけれ。
 老らくの齡にもめげず、健やかに、忠なる聲の、
 何時もいつも、梵音妙に深くして、穩どかなるは、
 陣營の歩哨にたてる老兵の姿に似たり。

そも、われは心破れぬ鬱憂のすさびごゝちに、
 寒空の夜に響けと、いとせめて、鳴りよそふとも、

覺束な音にこそたてれ、弱聲の細音も哀れ、

哀れなる臨終の聲は、血の波の湖の岸、
 小山なす屍の下に、身動もえならで死する、
 棄てられし負傷の兵の息絶ゆる終の呻吟か。

「ボドレエル——『悪の華』」

人と海

こゝろ自由なる人間は、とはに賞づらむ大海を。
海こそ人の鏡なれ。灘の大波はてしなく、
水や天なるゆらゆらは、うつし心の姿にて、
底ひも知らぬ深海の潮の苦味も世といづれ。
さればぞ人は身を映す鏡の胸に飛び入りて、

眼に抱き腕にいだき、またある時は村肝の
心もともに、はためきて、潮騒高く湧くならむ、
寄せてはかへす波の音の、物狂ほしき歎息に。
海も爾もひとしなみ、不思議をつゝむ陰なりや。
人よ、爾が心中の深淵探りしものやある。
海よ、爾が水底の富を數へしものやある。
かくも妬げに秘事のさはにもあるか、海と人。

かくて劫初の昔より、かくて無数の歳月を、
慈悲悔恨の弛無く、修羅の戦酣に、
げにも非命と殺戮となじかは、さまで好もしき。
噫、永遠のすまうとよ、噫、怨念のはらからよ。

〔ボドレエル——『悪の華』〕

梟

黒葉水松の木下闇に
並でとまる梟は
昔の神をいきうつし、
赤眼むきだし思案顔。

體も崩さず、ちつとして、

なにを思に暮がたの

傾く日脚推しこかす

大凶時となりけり。

鳥のふりみて達人は

道の悟や開くらむ、

世に忌々しきは煩惱と。

色相界の妄執に

諸人のつねのくるしみは

居に安ぜぬあだ心。

「ボドレネル——『悪の華』」

現代の悲哀はボドレエルの詩に異常の發展を遂げたり。人或は一見して云はむ、これ僅に悲哀の名を變じて鬱悶と改めしのみと、而も再考して終に其全く變質したるを曉らむ。ボドレエルは悲哀に誇れり、即ち之を詩章の龍蓋帳中に据ゑて、黒衣聖母の觀あらしめ、絢爛なること繪畫の如き幻想と、整美なること彫塑に似たる夢思とを恣にして之に生動の氣を與ふ。是に於てか、宛もこれ絶美なる獅身女頭獸なり。悲哀を愛するの甚しきは、いづれの

先人をも凌ぎ、常に悲哀の詩趣を讃して、彼は自ら「悲哀の煉金道士」と號せり。

先人の多くは、惱心地定かならぬまゝに、自然に對する心中の愁訴を、自然其物に捧げて、尋常の失意に泣けども、ボドレエルは然らず。彼は都府の子なり。乃ち巴里叫喊地獄の詩人として胸奥の悲を述べ、人に叛き世に抗する數奇の放浪兒が爲に、大聲を假したり。其心、夜に似て暗憺、いひしらす、汚れにたれど、また一種

の美、たとへば、濁江の底なる眼、哀憐悔恨の凄
光を放つが如きもの無きにしもあらず。

〔エミール・エルハアレン〕

ポドレエル氏よ、君は藝術の天にたぐひなき
凄惨の光を與へぬ。即ち未だ曾て無き一の戰
慄を創成したり。

〔ボクトル・エウゴオ〕

譬喻

主は讚むべき哉、無明の闇や、憎多き
今の世にありて、われを信徒となし給ひぬ。
願はくは吾に與へよ、力と沈勇とを。
いつまでも永く狗子のやうに従ひてむ。

生贖の羊、その母のあと、従ひつゝ、
何の苦もなく、牧草を食み、身に生ひたる
羊毛のほか、に、その刻來ぬれば、命をだに
惜まずして、主に奉る如くわれもなさむ。

また魚とならば、御子の頭字象りもし、
驢馬ともなりては、主を乗せまつりし昔思ひ、

はた、わが肉より穰ひ給ひし豕を見いづ。

げに末つ世の反抗表裏の日にありては
人間よりも、畜生の身ぞ信深くて
心素直にも忍辱の道守るならむ。

〔エルレエヌ——「詩集」〕

よくみるゆめ

常によく見る夢乍ら奇やし懐かし身にぞ染む。
曾ても知らぬ女なれと思はれ思ふかの女よ。
夢見る度のいつもいつも同じと見れば異りて、
また異らぬおもひとわが心根や悟りてし。

わが心根を悟りてしかの女の眼に胸のうち、
噫、彼女にのみ内證の秘めたる事ぞ無かりける。
蒼ざめ顔のわが額、ととの汗を拭ひ去り、
涼しくなさむ術あるは、玉の涙のかのひとよ。

栗色髪の一となるか、赤髪の一とか、金髪か、
名をだに知らね、唯思ふ朗ら細音のうまし名は、

うつせみの世を疾く去りし昔の人の呼名かと。

つくづく見入る眼差は匠が彫りし像の眼か、
澄みて、離れて、落居たる其音聲の清しさに、
無言の聲の懐かしき戀しき節の鳴り響く。

「エルレエヌ——『詩集』」

落葉

秋の日の

#オロンの

ためいきの

身にあみて

したぶるに

うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の

おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく
とび散らふ

落葉かな。

七六

〔エルレヌー——詩集〕

佛蘭西の詩はユウゴオに繪畫の色を帯び、ル
コント・ドゥ・リイルに彫塑の形を具へ、エルレ
ヌに至りて音樂の聲を傳へ、而して又更に
陰影の匂なつかしきを捉へむとす。

〔譯者〕

良心

革衣纏へる兒等を引具して
髪おとろ色蒼ざめて、降る雨を、
エホバよりカインは離り迷ひいで、
夕闇の落つるがまゝに愁然と、
大原の山の麓にたどりつきぬ。

七七

妻は倦み兒等も疲れて諸聲に、
地に伏していざいのねむ」と語りけり。
山陰にカインはいねず夢おぼろ、
鳥羽玉の暗夜の空を仰ぎみれば、
廣大の天眼くわつと、かしこくも、
物陰の奥より、ひしと、みいりたるに、
わなゝきて「未だ近し」と叫びつゝ、

倦みし妻眠れる兒等を促して、
もくねんと、ゆくへも知らに逃れゆく。
かゝなべて、日には三十日夜は、三十夜、
色變へて、風の音にもをのゝきぬ。
やははれの伏眼の旅は果もなし、
眠なく休ひもえせで、はろばろと、
後の世のアシユルの國、海のほとり、

荒磯にこそはつきにけれいざ、こゝに
 とまらむ。この世のはてに今ぞ來し、
 いざ」といへば、陰雲暗らきめちのあなた、
 いつも、いつも、天眼ひしと睨みたり。
 おそれみに身も世もあらず、戦きて。
 「隠せよ」と叫ぶ一聲。兒等はたゞ
 猛き親を口に指あて眺めたり。

沙漠の地、毛織の幕に住居する
 後の世のうからのみおやヤバルにぞ
 「このむたに幕ひろげよ」と命ずれば、
 ひるがへる布の高壁めぐらして
 鉛もて地に固むるに、金髪
 孫むすめ曙のナラは語りぬ。
 「かくすれば、はや何も見給ふまじ」と。

「否なほも眼睨む」とカインいふ。
 角を吹き鼓をうちて、城のうちを
 ゆきめぐる民草のおやユバルいふ、
 「おのれ今固き守や設けむ」と。
 銅の壁築き上げて父の身を、
 そがなかに隠しぬれども、如何せむ、
 「いつも、いつも眼睨む」といらへあり。

「恐しき塔をめぐらし、近よりの
 難きやうにすべし。岩守る城築あけて、
 その邑を固くもらむ」と、エノクいふ。
 鍛冶の祖トバルカインは、いそしみて、
 宏大の無邊都城を営むに、
 同胞は、セツの兒等、エノスの兒等を、
 野邊かけて狩暮しつゝ、ある時は

旅人の眼をくりて、夕されば
 星天に征矢を放ちぬ。これよりぞ、
 花崗石、帳に代り、くろがねを
 石にくみ、城の形、冥府に似たる
 塔影は野を暗うして、その壁ぞ
 山のごと厚くなりける。工成りて
 戸を固め、壁建終り、大城戸に

刻める文字を眺むれば「このうちに
 神はゆめ入る可からず」とゑりにたり。
 さて親は石殿に住はせられたど、
 憂愁のやつれ姿ぞいちらしき。
 おほち君、眼は消えしや」と、チヲの間へば、
 「否、そこに今もなほ在り」と、カインいふ。
 「墳塋に寂しく眠る人のごと、

地の下にわれは住はむ。何物も
 われを見じ。吾も亦何をも見じと。
 さてこゝに坑を穿てば「よし」といひて、
 たゞひとり闇穴道におりたちて、
 物陰の座にうちかくる、ひたおもて、
 地下の戸を、はたと閉づれば、こはいかに、
 天眼なほも奥津城にカインを眺む。

〔井クトル・ユウゴオ——『古今傳説集』〕

ヌウゴオの趣味は典雅ならず、性情奔放にし
 て狂飈激浪の如くなれど、温籍静冽の氣自か
 ら其詩を貫きたり。對聯比照に富み、光彩陸離
 たる形容の文辭を疊用して、燦爛たる一家の
 詩風を作りぬ。

〔譯者〕

禮拜

さても千八百九年、サラゴサの戦、
われ時に軍曹なりき。此日慘憺を極む。
街既に落ちて、家を圍むに、
閉ぢたる戸毎に不順の色見え、
鐵火窓より降りしきれば、

「憎つくき僧徒の振舞」と
かたみに低く罵りつ。
明方よりの合戦に
眼は硝煙に血走りて、
舌には苦がき紙筒を
噛み切る口の黒くとも、
奮闘の氣はいや益しに、

勢猛に追ひ迫り、
 黒衣長袍ふち廣き帽を狙撃す。
 狭き小路の行進に
 とざま、かうざま顧みがち、
 われ軍曹の任にしあれば、
 精兵從へ推しゆく折りも、
 忽然として中天赤く、

鑛爐の紅舌さながらに、
 虐殺せらるゝ婦女の聲、
 遙かには轟々の音とよもして、
 歩毎に伏屍累々たり。
 屈でくるゝ軒下を
 出でくる時は銃劔の
 鮮血淋漓たる兵が、

血紅に染みし指をもて、
壁に十字を書置くは、
敵潜めるを示すなり。
鼓うたせず、足重く、
將校たちは色曇り、
さすが、手練の舊兵も、
落居ぬけはひに、寄添ひて、

新兵もどきの胸さわぎ。

忽ちとある曲角に、
援兵と呼ぶ佛語の一聲、
それ、戦友の危急ぞと、
駆けつけ見れば、きたなしや、
日常は猛けき勇士等も、

精舎の段の前面に
 たゞ僧兵の二十人、
 圓頂の黒鬼にくひとめらる。
 眞白の十字胸につけ、
 靴無き足の凜々しさよ、
 血染の腕巻きあげて、
 大十字架にて、うちかゝる。

慘絶壯絶それと一齊射撃にて、
 やがては掃蕩したりしが、
 冷然として、残忍に、軍は倦みたり。
 皆心中に疾しくて、
 とかくに殺戮したれども、
 醜行已に爲し了はり、
 密雲漸く散ずれば、

積みかきなれる屍より
階かけて、紅流れ、

そのうしろ樓門聳ゆ、巍然として鬱たり。

燈明くらがりに金色の星ときらめき、
香爐かぐはしく、静寂の香を放ちぬ。
殿上、奥深く、神壇に對ひ、

歌樓のうち、やさけびの音しらぬ顔、
蕭やかに勤行營む、白髮長身の僧。
噫けふもなほ、佛にして、浮びこそすれ。

モオル廻廊の古院、
黒衣僧兵のかばね、
天日石だゝみ、を照らして、
紅流に烟たち、

臃々たる低き戸の匡に、

立つや老僧。

神壇龕のやうに輝き、

啞然としてすくみしわれらのうつけ姿。

げにや當年の己は

空恐ろしくも信心無く、

或日精舎の奪掠に

負けじ心の意氣張つよく

神壇近き御燈に

煙草つけたる亂行者、

上反鬚に氣負みせ、

一步も譲らぬ氣象のわれも、

たゞ此僧の髮白く白く

神寂びたるに畏みぬ。

「打て」と士官は號令す。

誰有て動く者無し。

僧は確に聞きたらむも、

さあらぬ素振神々しく、

聖水大盤を捧げてふりむく。

ミサ禮拜半に達し、

司僧むき直る祝福の時、

腕は伸べて鶴翼のやう、

衆皆一步たじろきぬ。

僧はすこしもふるへずに

信徒の前に立てるやう、

妙音濺なく和讃を咏じて、

「歸命頂禮」の歌、常に異らず、
聲もほがらに、

「全能の神、爾等を憐み給ふ。」

またもや、一聲あらゝかに
うてと士官の號令に
進みいでたる一卒は

隊中有名の卑怯者、
銃執りなほして發砲す。
老僧、色は蒼みしが、
沈勇の眼明らかに、
祈りつゝけぬ、

「父と子と。」

續いて更に一發は、
 狂氣のさたか、血迷か、
 とかくに業は了りたり。
 僧は隻腕壇にもたれ、
 明いたる手にて祝福し、
 黄金盤も重たげに、
 虚空に恩赦の印を切りて、

音聲こそは微なれ、
 圓たる堂上とほりよく、
 瞑目のうち述ぶるやう、

「聖靈と。」

かくて仆れぬ禮拜の事了りて。

盤は三たび床上に跳りぬ。
 事に慣れたる老兵も、
 胸に鬼胎をかき抱き
 足に兵器を投げ棄て、
 われとも知らず膝つきぬ、
 醜行のまのあたり、
 殉教僧のまのあたり。

聊爾なりや「アアメン」と
 うしろに笑ふわが隊の鼓手。

「フランソア・コベエ」『詩集』

わすれなぐさ

ながれのきしのひともとは、
みそらのいろのみづあさぎ、
なみ、ことごとく、ちづけし
はた、ことごとく、わすれゆく。

「キルヘルム・アレン」
——『詩集』

山のあなた

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ。
噫、われひと、尋めゆきて、
涙さしぐみ、かへりきぬ。
山のあなたになほ遠く

「さいはひす」
幸往むと人のいふ。

「カアル・ブッセ」——「詩集」

春

森は今、花さきみだれ
艶なりや、五月たちける。
神よ、擁護をたれたまへ、
あまりに幸のおほければ。

やかてぞ花は散りまほみ、
艶なる時も過ぎにける。
神よ擁護をたれたまへ、
あまりにつらき災な來そ。

「パウロ・パルシユ

『詩集』

秋

けふつくづくと眺むれば、
悲の色口にあり。
たれもつらくはあたらぬを、
なぜに心の悲める。

秋風わたる青木立
葉なみふるひて地にしきぬ。
きみが心のわかき夢
秋の葉となり落ちにけむ。

「オイゲン・シロアサン——『詩集』」

わかれ

ふたりを「時」がさきしより。
晝は事なくうちすきぬ。
よろこびもなく悲まず。
はたたれをかも怨むべき。

されど夕闇おちくれて、
星の光のみゆるるとき、
病の床のちごのやう、
心かすかにうめきいづ。

〔ヘリベルタ・フォン・ホシンドル——『詩集』〕

水無月

子守歌風に浮びて、
暖かに日は照りわたり、
田の麥は足穂うなだれ、
茨には紅き果熟し、
小河には木の葉みちたり。

いかにおもふわかきをみなよ。

〔テオドル・ストルム——「詩集」〕

花のをとめ

妙たに清きらのあゝわが兒こよ、
つくづくみれば、そゝろあはれ、
かしらや撫なで、花はなの身みの
いつまでもかくは清きらなれと、
いつまでもかくは妙たにあれと、

いのらまし、花のわがめぐし。

〔ハイネ—『詩集』〕

ルビンスタインのめでたき楽譜に合せて、ハイネの名歌を譯したり、原の意を汲みて餘さじと、つとめ、はた又、句讀、停音すべて樂譜の示すところに従ひぬ。

〔譯者〕

瞻望

怕るゝか死を。喉塞ぎ、

おもわに狭霧、

深雪降り、木枯荒れて、著るくなりぬ、

すゑの近さも。

夜の稜威暴風の襲來、恐ろしき

敵の屯に、

現身の大畏怖立てり。志かすがに

猛き人は行かざらめやも。

それ、旅は果て、峯は盡きて、

障礙は破れぬ。

唯、するの譽の酬えむとせば、

なほひと戦。

戦は日ごろの好いざらば、

終の晴の勝負せむ。

なまじひに眼ふたぎて、赦るされて、

這ひゆくは憂し、

否、残なく味ひて、かれも人なる

いにしへの猛者たちのやう、

矢表に立ち、樂世の寒冷、苦痛、暗黒の

貢のあまり捧げてむ。

そも勇者には、忽然と禍福に轉ずべく

闇は終らむ。

四大のあらび忌々しかる羅刹の怒號、

ほそりゆき、雜りけち

變化して苦も樂とならむとやすらむ。

そのとき光明その時、御胸

あはれ、心の心とや抱きしめてむ。

そのほかは神のまにまに。

「ブラウニング」 「曲中人物」

出現

苔むしろ、飢ゑたる岸も

春來れば、

つと走る光そらいろ、

堇咲く。

村雲の志がむみそらも、

こゝかしこ、

やれやれて影はさやけし、

ひとつ星。

うつし世の命を耻の

めぐらせど、

こぼれいつる神のるまひか、

君がおも。

「ブラウニング」『クロアシックニ詩人』

岩陰に

一

嗚呼、物古りし鳶色の「地」の微笑の大きやかに、
親しくもあるか、今朝の秋、偃曝に其骨を、
延し横へ、膝節も、足も、つきいで、漣の

悦び勇み、小躍に越ゆるがまゝに浸たりつゝ、
さて歛つる耳もとの、さゞれの床の海雲雀、
和毛の胸の白妙に轉ずる聲のあはれなる。

二

この教こそ神ながら舊るき眞の道と知れ。
翁びし「地」の知りて笑む世の試ぞかやうなる。

愛を捧げて價值あるものゝみをこそ愛しなば、
愛は完たき益にして、必らずや、身の利とならむ。
思の痛み、苦みに卑しきこゝろ清めたる
なれ自らを地に捧げ、酬は高き天に求めよ。

「ブラウニング——『ジェイムズ・ライの妻』」

春の朝

時は春

日は朝

朝は七時

片岡に露みちて

揚雲雀なのりいで

蝸牛枝に這ひ

神そらに知らしめす

すべて世は事も無し

「ブラウニング——『ビバの歌』」

至上善

蜜蜂の蜜にみてる一歳の香も、花も、
 寶玉の底に光れる鑛山の富も、不思議も、
 阿古屋貝映し藏せるわだつみの陰も、光も、
 香花陰光富不思議及ぶべしやは、
 玉よりも輝く眞

珠よりも澄みたる信義

天地にこよなき眞澄みわたる一の信義は

をとめこの清きくちづけ。

〔フテウニク—メニニニニ〕

ブラウニングの樂天説は、既に二十歳の作「ボ
オリイン」に顯れ、「ビバ」の歌「神、そらにしろしめ、
す、すべて世は事も無し」といふ句に綜合せら
れたれど、一生の述作皆人間終極の幸福を預
言する點に於て一致し、「アソランドオ」絶筆の
結句に至るまで、彼は有神論、靈魂不滅説に信
を失はざりき。此詩人の宗教は基督教を元と
したる「愛」の信仰にして、尋常宗門の繩墨を脱
し、教外の諸法に對しては極めて宏量なる態
度を持せり。神を信じ、其愛と其力とを信じ、之

を信仰の基として、人間恩愛の神聖を認め、精
進の理想を妄なりとせず、藝術科學の大法を
疑はず、又人心に善惡の奮闘争闘あるを、却て
進歩の動機なりと思惟せり。而してあらゆる
宗教の教義には重を措かず、たゞ基督の出現
を以て説明すべからざる一の神秘となせる
のみ。曰く、宗教にして、若し、萬世不易の形を取
り、萬人の爲め、預め劃然として具へられたら
むには、精神界の進歩は直に止りて、厭ふべき
凝滯はやがて來らむ。人間の信仰は定かなら

ぬこそをかしけれ、教法に完了といふ義ある可からずと。されば信教の自由を説きて、寛容の精神を述べたるもの、聖十字架祭の如きあり、殊に晩年に莅みて、教法の形式、制限を脱却すること益著るく、全人類に亘れる博愛同情の精神愈盛なりしかど、一生の確信は終始毫も渝ること無かりき。人心の憧がれ向ふ高大の理想は神の愛なりといふ中心思想を基として、幾多の傑作あり、クレオンには、藝術美に倦みたる希臘詩人の永生に對する熱望の悲

音を聞くべく、「ソオル」には、事業の永續に不老不死の影ばかりなるを喜ぶ事の果敢なき夢なるを説きて、更に個人の不滅を斷言す。亞刺比亞の醫師カアッシュの不思議なる醫術上の經驗」といふ尺牘體には、基督教の原始に遡りて、意外の側面に信仰の光明を窺ひ、「砂漠の臨終」には神の權化を目撃せし聖約翰の遺言を耳にし得べし。然れども是等の信仰は、盲目なる狂熱の獨斷にあらず、皆冷靜の理路を辿り、若しくは、精練微を穿てる懷疑の坩堝を経た

るものにして「監督ブルウグラムの護法論」「フェ
 リシユタアの念想」等之を證す。之を綜ぶるに、プ
 ラウニングの信仰は、精神の難關を凌ぎ、疑惑
 を排除して、光明の世界に達したるものにし
 て、永生の大信は世を終るまで動かざりき。ラ、
 セイジャス」の秀什、この想を述べて餘あり、又、
 千八百六十四年の詩集に收めたる「瞻望」の歌
 と、千八百八十九年の詩集「アソランドオ」の絶
 筆とは此詩人が宗教觀の根本思想を包含す。

〔譯者〕

花くらべ

燕も來ぬに水仙花

大寒こさむ三月の

風にもめげぬ凜々しさよ。

またはジユノウのまぶたより、

井イナス神の息よりも

なほ藤らふたくもありながら、
 堇すみれの色いろのおぼつかな。
 照てる日ひの神かみも仰あやぎえで
 嫁とらきもせぬに散ちりはつる
 色いろ蒼あをざめし櫻さくら草、
 これも少女をとめの習ならひかや。
 それにひきかへ九輪くわん草、

編笠あみがさ早さ百合ゆり氣きがつよい。
 百ゆり合りもいろいろあるなかに、
 鳶尾いちはひ草ぐさのよけれども、
 あゝ、今いまは無なし、まよんがいな。

〔シエイクスビヤ——「冬物語」〕

花の教

心をとめて窺へば花自ら教あり。
 朝露の野薔薇のいへる、
 艶なりや、われらの姿、
 刺に生ふる色香とも知れ。
 麥生のひまに罌粟のいふ、

「せめては紅きはしも見よ、
 そばめられたる身なれども、
 験ある露の薬水を
 盛りさゝげたる盃ぞ。」
 この時、百合は追風に、
 「見よ、人、われは言葉なく
 法を説くなり。」

みづからなせる葉陰より、
聲もかすかに堇草、
人はあだなる香をきけど、
われらの示す教曉らじ。

〔クリステイナ・ロセッティ——「詩集」〕

小曲

小曲は刹那をとむる銘文、また譬ふれば、
過ぎにしも過ぎせぬ過ぎしひと時に、劫の心の
捧げたる願文にこそ。光り匂ふ法の會のため、
祥もなき預言のため、折からのけちめはあれど、
例も例も堰きあへぬ思豊かにて切にあらなむ。

「日」の歌は象牙にけつり、夜」の歌は黒檀に彫り、
頭なる華のかざしは輝きて、阿古屋の珠と、
照りわたるきらびの榮の蔭たさを「時」に示せよ。

小曲は古泉の如く、それが表、心あらはる、
うらがねをいつれの力しろすとも、あるは「命」の
威力あるもとめの貢、あるはまた貴に妙なる。

「戀」の供奉にかづけの纏頭と贈らむも、よし「遮」莫、
三瀬川船はて處陰暗き伊吹の風に、
「死」に拂ふ渡の老ると、船人の掌にとらさむも。

「ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ」——『命の家』

戀の玉座

心のよしと定めたる力かずかず、たぐへみれば、

「眞」の唇はかしこみて「望」の眼、天仰ぎ

「譽」は翼、音高に埋火の過去、煽ぎぬれば

飛火の焰、紅々と炎上のひかり、忘却の

去なむとするを驚し、飛び翔けるをぞ控へたる。

また後朝に巻きまきし玉の柔手の名残よと、

黄金くしげのひとすぢを肩に残し、「若き世」や

「死出」の挿頭と、例も例もあえかの花を編む命。

「戀」の玉座は、さはいへど、そこにしも在じ、空遠く、

逢瀬、別の辻風のたち迷ふあたり、離りたる

夢も通はぬ遠づくに、無言の局奥深く、

設けられたり。たとへそれ「眞」は「戀」の眞心を
夙に知る可く「望」こそ、それを預言し「譽」こそ、
そがためによく「若き世」めぐし「命惜」とも。

「ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ」——「命の家」

春の貢

草うるはしき岸の上に、いと美るはしき君が面
われは横へ、その髪を二つにわけてひろぐれば、
うら若草のはつ花も、はな白みてや、黄金なす
みぐしの間のこゝかしこ、面映げにも覗くらむ
去年とやいはむ今年とや年の境もみえわかぬ

けふのこの日や「春」の足半たゆたひ、小李の
葉もなき花の白妙は雪間がくれに迷はしく、
「春」往む庭の四阿屋に風の通路ひらけたり。

されど卯月の日の光けふぞ谷間に照りわたる。
仰ぎて眼閉ち給へ、いざくちづけむ君が面、
水枝小枝にみちわたる「春」をまなびて、わが戀よ、

濶かき喉熱き口、ふれさせたまへ、けふこそは、
契もかたきみやづかへ、戀の日なれや冷かに
つめたき人は永久のやはられ人と、貶し憎まむ。

〔ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ〕 『命の家』

心も空に

一五六

心も空に奪れて物のあはれをしる人よ、
今わが述ぶる言の葉の君の傍に近づかば
心に思ひ給ふこと應へ給ひね洩れなくと、
綾に畏こき大御神「愛」の御名もて告げまつる。

さても星影きらゝかに、更け行く夜も三つ一つ
ほとほと過ぎし折しもあれ、忽ち四方は照渡り、
「愛」の御姿うつそ身に現はれいでし不思議さよ。
おしはかるだに、その性の恐しときく荒神も

御氣色いと、麗はしく在すが如くおもほえて、
御手にはわれが心の臓、御腕には貴やかに

一五七

あえかの君の寝姿を、衣うちかけて、かい抱き、

やをら動がし、交睫の醒めたるぼとに心の臓、
さゝげ進むれは、かの君も恐る恐るに聞しけり。
「愛」は乃ち馳せ走りつ、馳せ走りながら打泣きぬ。

「ダンテ・アリギエリ」——『新生』

鷺の歌

ほのぐらき黄金隠沼、
骨蓬の白くさけるに、
静かなる鷺の羽風は
徐に影を落としぬ。

水の面に影は漂ひ、
廣ごりて、ころもに似たり。
天なるや、鳥の通路、
羽ばたきの音もたえだえ。

漁子のいと賢しらに
清らなる網をうてども、

空翔ける奇しき翼の
おとなひをゆめだにあらさ

また知らず日に夜をつぎて
溝のうち花瓶の底
鬱憂の網に待つもの
久方の光に飛ぶを。

「エミール・エルハアレン」——『詩集』

ポドレエルにはのめき、エルレエヌに現はれたる詩風はこゝに至りて、終に象徴詩の新體を成したり。此「驚の歌」以下「嗟嘆」に至るまでの詩は多少皆象徴詩の風格を具ふ。

〔譯者〕

法の夕

夕日の國は野も山も、その「平安」や「寂寥」の
黝の色いろうの毛布けふのもて掩おほへる如く、物寂ものさびぬ。
萬物ばんぶつ凡たゞて整ととのふり、折をりめ正ただしく、ぬめらかに、
物の象ものかたちも筋すぢめよく、ピザンチン繪えの式かたの如ごとく。

時雨村雨、中空を雨の矢數につんざきぬ。
見よ、一天は紺青の伽藍の廊の色にして、
今こそ時は西山に入日傾く夕まぐれ、
日の金色に鳥羽玉の夜の白銀まじるらむ。

めちの界に物も無し、唯遠長き並木路、
路に沿ひたる檜の樹は、巨人の列の佇立、

疎らに生ふる箒木や、新墾小田の末かけて、
鋤休めたる野らまでも領ずる顔の姿かな。

木立を見れば沙門等が野邊の送の營に、
夕暮がたの悲を心に痛み歩むごと、
また古の六部等が後世安樂の願かけて、
靈場詣杖重く、番の御寺を訪ひしごと。

赤々として暮れかゝる入日の影は牡丹花の
眠れる如くうつろひて、河添馬道開けたり。
噫、冬枯や、法師めくかの行列を見てあれば、
たとしへもなく静かなる夕の空に二列、

瑠璃の御空の金砂子星輝ける神前に

進み近づく夕づとめ、ゆくてを照らす星辰は
壇に捧ぐる御明の大燭臺の心にして、
火こそみえけれ、其棹の閻浮提金ぞ隠れたる。

〔エミール・ゼルハアレン〕 『沙門』

水かひば

ほらあなめきし落窪の、
夢も曇るかこもり沼は、
腹あめすまで浸りたる
まだら牡牛の水かひ場。

坂くだりゆく牧がむれ、
牛は練りあし馬は跑、
時しもあれや落日に
嘯き吼ゆる黄牛よ。

日のかぐろひの寂寞や、
色もにほひも日のかげも、